

昭和初期の神戸住宅におけるコモン空間の家具についての研究

21919027 田代いづみ
指導教員 葉袋奈美子 教授

神戸洋家具 昭和初期 歴史的家具
木製家具 籐家具

1. 研究の背景と手法

家具は生活と密接に結びつき、住む人の習慣や文化が反映されている。古い住宅は建物だけではなく家具にも焦点を当てて調査することで、より居住空間としての使われ方が明らかになる。本研究では昭和初期に神戸に竣工し今でも当時の家具が残されている、同家族の本宅と山荘を対象に調査を行った。

神戸洋家具産業は 1868 年の神戸港開港以来、居留地や雑居地に居留する外国人から直接依頼された洋家具の修理や再生販売の実用的需要を契機として自然発生的に発祥し、独自に発展した。居留地の外国人や塩飽大工の技術を取り込み、大阪京都の消費力があつたのも地場産業として定着した理由である。神戸洋家具は建築空間の洋風化を実現する技術を早くから確立し、明治初期から現代にいたるまでの約 150 年間、洋家具製作を継承している事業者を有する希少な系譜である。先行研究では文化財指定された住宅の家具を調査対象としており、研究対象の事例が少ないことから、神戸家具の記録を行うことは意義があると考えられる。昭和初期の神戸の住宅家具について本宅、山荘で測量・素材や構造の調査・撮影を行いリスト化した。昭和中期～後期に居住していた方と、明治初期から続く神戸洋家具製作所の永田良介商店でヒアリングを行い分析を深めた。

2. 本宅の家具とその配置

昭和 11 年に清水組によって建てられた洋館で、全室が洋間である。減築・改修を繰り返しているが、玄関、応接間、ホールは保存すべき重要な建造物であるとして保存され、「ひょうごの近代住宅 100 選」に選定された通り創建当初の趣がよく残されている。家具の調査は玄関、ホール、応接間を対象に行い、机が 9 種類 9 点、椅子が 7 種類 18 点、チェストが 2 種類 2 点の、計 18 種類 29 点見つかった。これらについて寸法、材質、特色などをまとめて一覧化した。また当時と現在で家具配置が異なっていたため、当時の配置を聞き取りによって図面に起こし、家具の使われ方を記録した。

家具は全て洋家具であった。調査した家具の内、意匠や塗装方法から永田良介商店で制作されたと推測できる家具が数点あった。一方で共通の三本線のモチーフが使

われ、花や植物を連想させるモチーフがピンポイントで彫り込まれている家具があったが、これらの華奢な印象の意匠は永田良介商店以外の製作所で設計・製作された可能性が高い。三本線のモチーフが使われた家具は表 1 で示す通り数が多く、また同じデザインで椅子や机が揃えられていることから、本宅の竣工に合わせて、内装とリンクさせて家具メーカーが製作したものであると考える。神戸では内装設計を家具メーカーが担当することも多かったことがヒアリングによって明らかになっており、本宅のインテリア全体を同じ家具メーカーがデザインした可能性もある。明治初期から名前を変えずに技術を継承し続けている事業者は永田良介商店のみであるが、昭和初期には永田良介商店以外の事業主も家具・内装設計において受注を行っていたことが分った。(表 1)

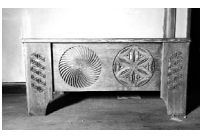




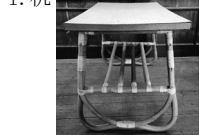

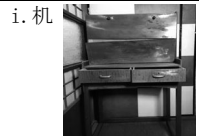

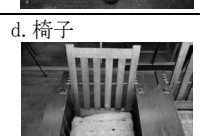


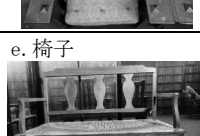


表 1 本宅家具の意匠による分類

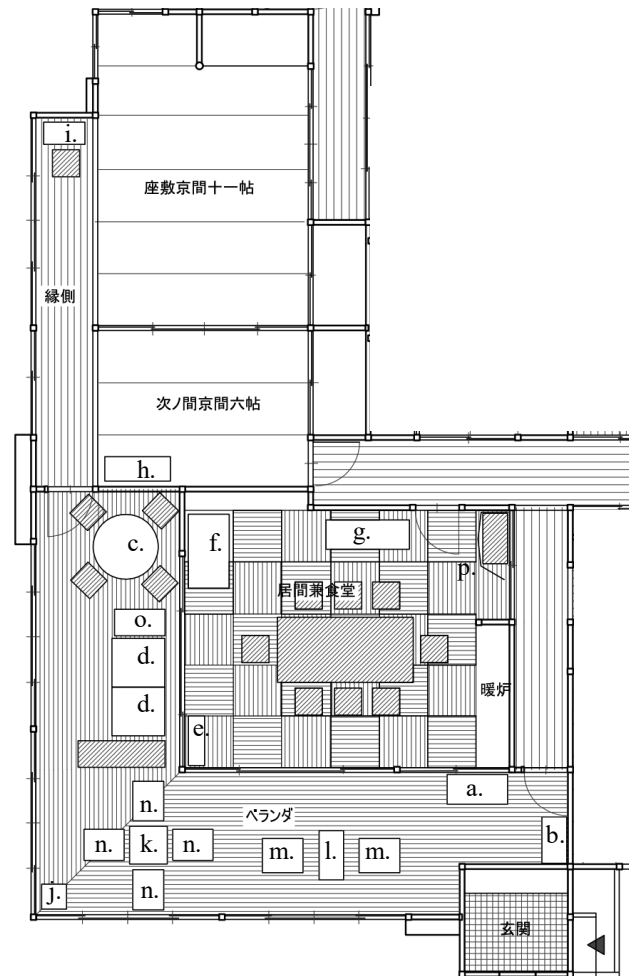
分類	永田良介商店で制作された可能性のある家具	三本線のモチーフが彫り込まれた家具
数量	机 3 点、飾り棚 1 点	机 4 点、椅子 10 点、チェスト 1 点、キャビネット 1 点
家具例	  	  

3.山荘の家具とその配置

山荘は六甲山に7月から9月にかけて居住する山荘として昭和6年に建てられた。昭和9年以降間取りなどの大きな改修は行われていない。建物は損傷が進んでいたが、生活空間は昭和初期の状態のままで保存されている。居間兼食堂、ベランダ、縁側、京間の計22点の家具について測量と聞き取りを行った。その内籐家具の数も多く7種類12点が確認できた。(表2) 籐家具は、軽量のためベランダ内を移動したり、写真撮影のために庭に持ち出していた。山荘については施主の妻が図面や内装のイメージを書いて要望を清水組に伝えていたらしく、本宅のように家具屋が設計した家具ではなく自由に使い勝手の良い家具を選んでいただと考えられる。ベランダの幅は9000mmと広く、軽量の家具を過ごし方に応じて配置し、リビングのように団らんを楽しむ空間であったことが分かる。(図2)

表2 山荘現存家具の材による分類

木製家具		籐・竹製家具
a. 台 	g. 配膳台 	k. 机 
b. 靴箱 	h. 箆筒 	l. 机 
c. 机 	i. 机 	m. 椅子 
d. 椅子 	j. 机 	n. 椅子 
e. 椅子 	/	
f. 机 		
/		p. 衝立 



ヒアリングに基づく家具の配置の再現。斜線家具は否現存で、筆者の推定

図2 山荘のコモン空間の家具配置

4.まとめ

本宅と山荘を比較すると、本宅は客間を設け来客を意識した間取りの住居で、装飾性の高い洋家具を用いていたのに対して、山荘は夏季の一時的な居住であり、家族のリラックス空間としてベランダで寛ぐ空間が大きく確保され、家具も通気性が良く運搬しやすい籐家具を用いていた。同時代の同じ家族の住宅家具であっても本宅と山荘では家具に大きく違いがあり、家具がその時代の居住者の生活スタイルを色濃く反映しているといえる。

住宅家具は調査が難しいが、古い住宅は建物だけではなく内装や家具にも価値があり調査対象とすべきである。

参考文献

- ・佐野浩三「神戸洋家具産業の明治八商機から昭和の経済成長期における事業化の経緯の構造化と社会的有用性の形成過程に関する研究」2017 芸術工学会誌